

明治期毛筆画教科書『玉泉習画帖』に みられる図画教育観

—京都市立芸術大学所蔵の粉本群（望月玉泉筆）との図像比較を通して—

竹内晋平（奈良教育大学准教授）

序

明治時代、『玉泉習画帖』と題された毛筆画教科書が京都で刊行された。実際に手に取り、桃色で装丁された表紙を開いてみると輝きを放つような多色摺りの絵手本の数々が現れる。かつての臨画教育において使用された毛筆画教科書である。

『玉泉習画帖』は、1891（明治24）年に望月玉泉（1834-1913）によって作成された。玉泉は望月派4代目の日本画家であり、京都府画学校東宗に出仕した人物でもある。本稿では、この『玉泉習画帖』を研究対象とし、その図像的背景を探ることを通して玉泉が体現しようとした普通教育における図画指導の様相について検討することを目的としている^①。

このため第1章においては、先行研究の動向について言及し、第2章では望月玉泉の経歴および『玉泉習画帖』についての予備的考察を行う。そして、第3章では玉泉筆と考えられる京都市立芸術大学所蔵の粉本群との比較調査を行うことを通して図像

の関連性を検討し、それらについての考察を第4章で行うこととする。

1 毛筆画教育と京都府画学校との関係

明治期の毛筆画教育全体を概観する上でまず想起されるのが、フェノロサや岡倉覚三による日本美術再興の運動である。毛筆画教育に関する先行研究としては、金子一夫による著書『近代日本美術教育の研究 明治時代』^②における論述が最も詳細であると考える。本研究を着想する上で、金子研究における次のような指摘は重要であった。明治期の毛筆画教育の地域的な特性として、金子は「普通教育への毛筆画導入に早くから動いていたのが石川県と京都府である。両方とも伝統的な美術工芸の産地であった。どちらにもフェノロサや岡倉が関わっているように思われる。どちらにも関わりがあるのは、京都府画学校である」と述べている。

金子と同様に、京都府による施策に京都府画学校が関与したという言説は、他にも

①本研究が扱う内容・史料等への考察に関しては、下記の拙稿において予備的な指摘を行っている。

竹内晋平「日本美術の教材化による芸術の社会化（I）－方法論を確立するための史的研究」『京都市立芸術大学美術教育研究会誌「美」』、第187号、京都市立芸術大学美術教育研究会、2012、pp.56-67

竹内晋平「造形活動における児童の感受を通した芸術発信Ⅱ」『大学美術教育学会誌』、第45号、大学美術教育学会、2013、pp.207-214

②金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』三版、中央公論美術出版、1999

③同上書、p.280

ある。中村隆文は自著において、巨勢小石（1843-1919、京都府画学校南宗に出身）が『小学毛筆画帖』（1888）を刊行した2ヶ月後に、京都府下の小学校教員を京都府画学校に招集して毛筆画伝習会を開催したことについて言及している^④。

上記のように毛筆を使用した臨画教育を重視するという施策に対して、開校まもない京都府画学校とその関係者が何らかの形で関与していた事実は、複数の先行研究および文献等から明らかとなっている。このような明治中期の状況において高等普通教育での使用を目的として、望月玉泉によって刊行されたのが『玉泉習画帖』である（1891（明治24）年）。ただし、刊行された経緯や玉泉がどのように普通教育に関与したのかについての研究は管見の限り見られない。まずは、玉泉の人物像とともに『玉泉習画帖』の概略を示すこととする。

2 『玉泉習画帖』について

2.1 望月玉泉—画業と経歴—

望月玉泉は1834（天保5）年に京都に生まれている。玉泉は前述のとおり、望月玉蟾（1692-1755）を祖とする望月派の日本画家である。玉泉を評した史料としては、田島達也が指摘する^⑤安政年間の『平安画家評判記』が、かなり古いものの1つであ

ろう。この『平安画家評判記』の記述に関して田島は、江戸時代末期に焼失した京都御所を再建する際、玉泉が22歳で東対屋の障壁画を担当したことは、画壇において大抜擢と認識されていたと指摘している^⑥。また、明治天皇即位の際に屏風を描いて献納したと指摘する文献もある^⑦。明治維新後は、パリ万国博覧会に「雕籬を養う図」^⑧を出品し、1904（明治37）年には帝室技芸員を拝命する^⑨等、着実に画業を重ねて画壇での地位を確かなものとしている。

本稿で着目するのは、望月玉泉の教育への関与である。1878（明治11）年に玉泉が、前述の巨勢小石、幸野楳嶺（1844-1895）らとともに京都府画学校設立を建議したことはよく知られている。玉泉はその後、京都府画学校東宗の副教員（後に三等教員）を務めている。また、前章でふれた金子研究によれば、京都府高等女学校の図画を担当した時期もあるとされている。金子の著書^⑩および『百年史－京都市立芸術大学』^⑪をもとにして、玉泉の教員経歴を下記の年表に示す。

- 1880年 京都府画学校東宗・副教員となる。
同年、京都府高等女学校・図画教員を併任。
1886年 京都府高等女学校を辞する。
1889年 京都府画学校を辞する。

④中村隆文『「視線」からみた日本近代 明治期図画教育史研究』第4刷、京都大学学術出版会、2006、p.92（中村による指摘の典拠は、京都市立芸術大学百年史編纂委員会『百年史－京都市立芸術大学』、京都市立芸術大学、1981、p.29）

⑤田島達也「『平安画家評判記』について」『美術京都』、第43号、公益財団法人中信美術奨励基金、2012、pp.16-35

⑥同上論文、p.24

⑦日本美術院百年史編集室『日本美術院百年史』、1卷上〔図版編〕、日本美術院、1989、p.664

⑧同上。表記は「雕養籬図」とも。

⑨同上

⑩金子一夫、前掲書、pp.602-604

⑪京都市立芸術大学百年史編纂委員会『百年史－京都市立芸術大学』、京都市立芸術大学、1981、pp.25-29

1891年 再び京都府高等女学校・図画教員となる（明治24年、玉泉58歳）。

1906年 京都府立第一高等女学校を辞する。

2.2 毛筆画教科書『玉泉習画帖』の概略

『玉泉習画帖』（著画者・望月玉泉、発行兼印刷者・田中治兵衛、図1）は、全4冊^⑫からなる毛筆画教科書で、折本形式の製本となっている。4冊の構成と掲載図版等は、以下のとおりである。

- ・第一冊「麟」（緒言+全12図版）
- ・第二冊「鳳」（全12図版）
- ・第三冊「亀」（全12図版）
- ・第四冊「龍」（全12図版）

第一冊「麟」に掲載されている「緒言」（図2）には、次のような記述がなされている（旧字体は、引用者が新字体に改めた）。

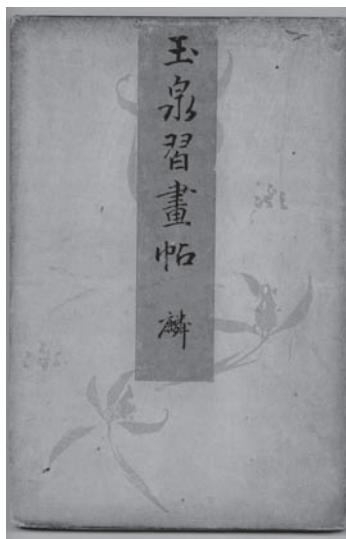


図1 『玉泉習画帖』（麟）、表紙

「緒言

一 本帖ハ高等ノ普通学校教科用書ニ充ツルノ目的ヲ以テ編製セルモノニシテ固ヨリ専門画学生ノ為ニ作レルニ非ス故ニ専ラ学生習熟ノ便ヲ圖リ可及的平易ノ筆法ヲ用ヒ以テ初学者ヲシテ容易ニ物形ヲ模写スルノ捷径ニ由ラシメントス（後略）^⑬

引用した「緒言」の冒頭部において、望月玉泉は高等普通学校での指導に供するものであることを明確に述べている。この「緒言」からは、著名な日本画家であり京都府画学校にも出仕した経歴をもつ望月玉泉が、「可及的平易ノ筆法ヲ用ヒ以テ初学者ヲシテ容易ニ物形ヲ模写スルノ捷径」を普通教育の中に伝えようとした強い意思を感じる。そして、「高等ノ普通学校教科用書」という

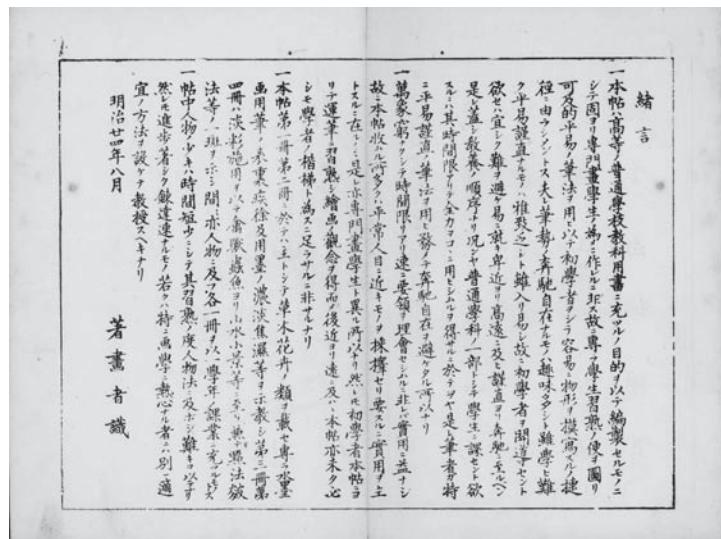


図2 『玉泉習画帖』（麟）、緒言

^⑫本稿が対象にしたものは全4冊であるが、この他に『玉泉習画帖 簡易科』や『玉泉習画帖 首巻』等の所在も確認している。これらと『玉泉習画帖』の関連については稿を改めて論じたい。

^⑬望月玉泉『玉泉習画帖』（麟）、田中治兵衛 発行、1891、冒頭頁（緒言）

記述と『玉泉習画帖』が発行された1891(明治24)年に着目すると、玉泉が京都府高等女学校に図画教員として2度目に赴任した時期と符合することがわかる。「京都府高等女学校本科課程表」^⑭を参照すると、第1～6学年において必ず「習画」が課されていることが読み取れる。この点からも『玉泉習画帖』は同女学校で使用する目的で作成されたと推察される。また本稿において、図像調査の対象とした4冊の『玉泉習画帖』は、奈良教育大学図書館が所蔵するものであるが、筆者が古書店より入手した別の『玉泉習画帖』には、この習画帖を使用した生

徒のものと思われる氏名とともに「本科二年生」との墨書きがなされていることが確認された。以上の状況から、『玉泉習画帖』は、主に京都府高等女学校本科等における図画指導に供するために玉泉によって作成されたと考えるのが合理的であるといえる。

次に、『玉泉習画帖』に掲載された図版について言及する。折本を開いた状態での版面の寸法は240mm×316mmであり、いずれの冊子・頁もほぼ同一である。掲載された図版は木版多色摺り印刷によるもので、技巧的な「ぼかし摺」も使用されていることがわかる(図3～6、4点を例示)。ど

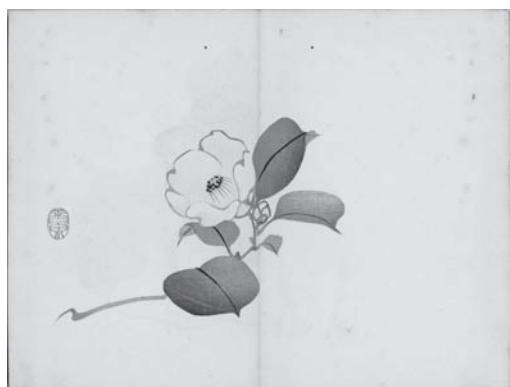


図3 『玉泉習画帖』(麟)「山茶花」(1891)



図4 『玉泉習画帖』(亀)「紅梅 鶯」(1891)



図5 『玉泉習画帖』(鳳)「葡萄」(1891)



図6 『玉泉習画帖』(龍)「紅楓 琉璃鳥」(1891)

^⑭京都鴨沂会『鴨沂会雑誌』、第8号、1895、p.p.62-63

の図版にも、他の明治初期の教科書等に掲載されたものとは一線を画す、優美な雰囲気がある。図版は木版印刷によって精緻かつ色彩豊かに仕上げられている。そして、愛らしい画題の図版が数多く掲載されており、当初から高等女学校での使用を意識して作成されていた可能性も高い。日本画と

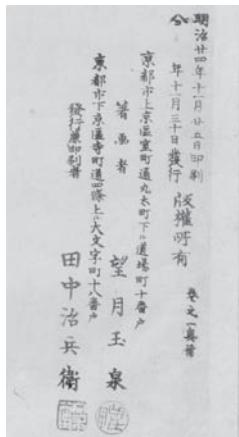


図7 「玉泉習画帖」(麟)、
奥付

表1 「玉泉習画帖」に掲載された画題

「麟」(第一冊)	「鳳」(第二冊)	「亀」(第三冊)	「龍」(第四冊)
稚松	牡丹	稻穂 雀	丹頂鶴
土筆	筍	黃蜀葵	棘鱉魚 文蛤
山茶花	薔薇	鯵	茄子 竈虫
蕪菁	葡萄	新柳 燕	魚狗
燕子花	茶花	櫻花	猫兒
桔梗	芒 女郎花	兒童 遊戲	江蒲 蜻蛉
蘿蔔	牽牛花	沼澤 狐帆	香魚
山茶梅	白萩 蝴蝶	月下雁	海濱光景
莧菜	蘭艸 促織	挿秧 蟹	紅楓 琉璃鳥
梅子	葛花	紅梅 鶯	雪中狗子
白桃	瞿麥 紺蠻	白鼠	植苗
櫻實	杉 杜鵑	湖上小景	瀑下奇巖

※ 表中では、実際に掲載された順序に依り、上から示している。見開きの寸法は、いずれも240mm×316mmで、ほぼ同一である。

⑯金子一夫、前掲書、p.282

女学校教育との関連性については、金子一夫が既に指摘している。それによると、高等女学校には日本画系の図画教員が配置されることが多かったとされている^⑯。金子が指摘するように、日本画と女子教育との関連は京都府高等女学校に限ったことではないとしても、『玉泉習画帖』には学習者を十分に惹きつける画題が選んで掲載され、上質な仕上げによって構成されているとの印象を受ける。このような点からは、歴史的に美術工芸品が根付いていた京都という地域性とともに、同高等女学校や作成に関わった版元(図7、奥付を参照)、そして玉泉の美的な価値に対する矜持を感じる。

紙幅の関係から本稿ですべての図版を紹介することはできないため、全4冊に掲載されている画題を表1にまとめた。次章に

においては、表1に示した『玉泉習画帖』と京都市立芸術大学が所蔵する粉本群（玉泉筆）との比較調査について述べる。

3 『玉泉習画帖』に掲載された図像と望月玉泉による粉本の図像との比較

3.1 京都市立芸術大学所蔵の粉本群

第2章で述べたとおり、望月玉泉は京都府高等女学校で図画を指導した時期と前後して、京都府画学校東宗の副教員・三等教員を担当している。京都市立芸術大学芸術資料館の松尾芳樹氏は、東宗の教育内容について、「京都府画学校東宗教則」を参照して詳述している^⑯。本稿においても、松尾氏が典拠とした『百年史－京都市立芸術大学』^⑰をもとに、「京都画学校東宗教則」（末尾に「明治十三年七月 東宗副教員 望月玉泉印」）、課業表「運筆」「着色」

表2 京都府画学校東宗 課業表（抜粋）

課程	「運筆」に示された課業
一級	人物、動物、山水、有職人物
二級	禽獸、魚類、山水
三級	魚虫、小禽、山水
四級	魚虫、小禽、樹石類
五級	墨画 草木、百花、菜蔬
六級	前級ニ同ジ

※「京都画学校東宗教則」を参照して筆者が作成

「模写」「写生」「位置」「予科」のうち、「運筆」を抜粋・引用して表2に示す。

京都市立芸術大学芸術資料館には、この東宗での課業「運筆」に使用されたと考えられる肉筆の「画学校粉本」^⑯が多数保存されている。この芸術資料館に保存されている画学校粉本のうち、望月玉泉筆であると確認されているものは46点であることを同資料館よりご教示いただいた。

上記に加え、同じく京都市立芸術大学教職課程研究室にも41点の肉筆粉本が保存されている。これらは2009年に望月家より一括して寄贈されたものであり、その多くには「玉泉」「望月」「資清館蔵本」等の印章（図8・9）が確認されることから、この41点の粉本群は望月玉泉によるものであると判断してよいと考える。そして、これらの粉本は同大学芸術資料館の所蔵本と同様に京都府画学校東宗の画学生指導に使用された画学校粉本の一部であった、あるいは京都府画学校関係者周辺の画塾（例えば「望月家の画塾資清館」^⑰）で使用された粉本の一部であった可能性が高いと推察される。



図8 「三級第七号」 図9 「一級第一号」の印章
の印章

⑯松尾芳樹 『円山四条派の画法 京の絵手本（下）野

菜・動物・魚介／習画帖篇』日貿出版社、1995、p.5

⑰京都市立芸術大学百年史編纂委員会、前掲書、p.159

⑯「画学校粉本」の呼称は松尾氏の前掲書に依った。

⑰京都市立芸術大学webサイト「望月家絵画資料」
<http://w3.kcua.ac.jp/muse/data/arcmochizukike.html>

その理由は下記の3点である。

- ・いずれの課程で使用されたかを示す「東」「級」「号」等が明記されている点。
- ・運筆練習の際に付着したと考えられる色料・墨等の汚れが散見される点。
- ・描かれた画題と京都府画学校東宗の課業（表2）とが概ね合致する点（次節にて詳述）。

筆者は京都市立芸術大学芸術資料館および同大学教職課程研究室においてそれぞれが所蔵する粉本を閲覧し、『玉泉習画帖』に掲載された図像との比較を行う機会を得た。比較の結果、これら望月玉泉による肉



図10 玉泉粉本（京芸教職研本）「東二級第三号」



図12 玉泉粉本（京芸教職研本）「五級第九号」

②各図の名称は、京都市立芸術大学芸術資料館よりご提供いただいた目録に依った。

筆の粉本の多くと木版印刷である『玉泉習画帖』との間に関連性が認められた。具体的には、同大学芸術資料館が所蔵する画学校粉本に関して、閲覧した46点のうち4点（「椿図」「桔梗図」「若竹図」「薔薇図」^②）に『玉泉習画帖』との画題・構図の類似傾向が見られた。また、同大学教職課程研究室所蔵の粉本に関しては、41点のうち12点に『玉泉習画帖』との画題・構図の類似傾向が見られた。次節では、『玉泉習画帖』と同大学教職課程研究室所蔵の粉本（図10～13、4点を例示）との関連に焦点を絞り、両者の図像を詳細に比較することとする。



図11 玉泉粉本（京芸教職研本）「参級拾七號」



図13 玉泉粉本（京芸教職研本）「二級」

なお、以降の記述では、「京都市立芸術大学教職課程研究室所蔵の粉本」を「玉泉粉本（京芸教職研本）」と表記することとする。

3.2 玉泉粉本（京芸教職研本）の概略

前節で述べたように、『玉泉習画帖』と玉泉粉本（京芸教職研本）との間には、関

連性が見られた。合計41点の玉泉粉本（京芸教職研本）を調査対象とするにあたり、筆者はその概略を把握するために記載された課程や粉本に描かれた画題等をもとにした一覧表を作成した（表3）。

その結果、これら41点の玉泉粉本（京芸教職研本）は、前節・表2に示した「京都

表3 玉泉粉本（京芸教職研本）一覧

課程の記載	画題	寸法(mm)	印章等	『玉泉習画帖』との比較
一級第壱号	鷹、松	313×340	「資清館藏本」方印	
二級	猿、柿	310×342	「資清館藏本」方印	
二級第一號	子犬、竹	312×337	「資清館藏本」方印	
二級壱號	子犬、南天	242×314		○「雪中狗子」（龍）
貳級拾壱號	岩、松、波	242×313		○「海濱光景」（龍）
東二級第三号	牛	309×344	「資清館藏本」方印	
二級第三号	魚	285×333	「資清館藏本」方印	
二級第六号	岩、人家	307×332	「資清館藏本」方印	
二級第九号	鼬	308×332	「資清館藏本」方印	
參級拾三號	岩、人家、水辺	242×313		○「湖上小景」（亀）
三級十六号	香魚	313×338	「望月」丸印	△「香魚」（龍）
參級拾六號	香魚	242×313		○「香魚」（龍）
參級拾七號	紅梅、鶯	242×314		○「紅梅 鶯」（亀）
參級拾七號	柳、鶯	244×312		
三級第四号	小鳥	312×337	「資清館藏本」方印	
三級第六号	狐	310×334	「資清館藏本」方印	
三級第七号	大根、鼠	313×335	「望月」丸印	
三級第九号	魚	314×340		
四級第十号	牡丹、螳螂	307×328	「資清館藏本」方印	
四級拾壹号	魚狗	242×313		○「魚狗」（龍）
四級第一九号	桜桃	309×333	「資清館藏本」方印	
四級貳號	紅楓、琉璃鳥	242×313		○「紅楓 琉璃鳥」（龍）
四級第貳号	小鳥、楓	308×331	「資清館藏本」方印	
四級廿号	児童、玩具	313×331		○「児童遊戯」（亀）
四級廿貳號	白萩、蝶	242×313	「玉泉」楷円印	○「白萩 蝶」（鳳）
四級廿肆號	杉、杜鵑	242×313	「玉泉」楷円印	○「杉 杜鵑」（鳳）
四級廿五號	塩田	301×313		
五級拾七號	鰯	242×313		○「鰯」（亀）
五級第十九号	葛	307×329	「資清館藏本」方印	△「葛花」（鳳）
五級第二十号	萩	310×337	「資清館藏本」方印	
五級第二十一号	藤袴	312×339	「資清館藏本」方印	△「蘭艸 促織」（鳳）
五級第二十三号	お多福	308×336	「資清館藏本」方印	
五級第三号	瓢箪、馬	309×332	「資清館藏本」方印	
五級第九号	葡萄	306×339	「資清館藏本」方印	△「葡萄」（鳳）
六級第二十一号	蕪	278×312		
六級第二十二号	湿地葦、楓、松葉	311×337		
六級二十四号	茄子	278×311		
六級參號	椿	242×313	「玉泉」楷円印	○「山茶花」（麟）
六級第三十三号	人物	307×339	「資清館藏本」方印	
六級第五号	土筆	309×336		△「土筆」（麟）
六級第八号	靈芝	278×311		

*『玉泉習画帖』との比較における凡例

◎：高い精度での類似傾向

○：類似傾向

△：画題の共通性

府画学校東宗教則」における六級から一級までの各課程に偏ることなく対応しているものであることが確認できる。そして東宗の課業として示されている、「禽獸」「山水」「草木」等々の内容と玉泉粉本（京芸教職研本）に描かれている画題とが、一部を除いて概ね矛盾なく合致することも確認された（表2・3をあわせて参照）。このような合致の傾向は、前節で述べた玉泉粉本（京芸教職研本）が京都府画学校東宗、またはその周辺において、専門教育としての絵画指導に使用されたと推察される根拠であると考える。

再び、表3について詳細に言及することとする。前述のように玉泉粉本（京芸教職研本）と『玉泉習画帖』との関連に着目すると下記の傾向を確認することができた。

- ・玉泉粉本（京芸教職研本）・41点のうち、17点に『玉泉習画帖』との画題の共通性がみられる（表3では「△」「○」「◎」）。
- ・上記17点のうち、12点に『玉泉習画帖』との画題・構図の類似傾向がみられる（表3では「○」「◎」）。
- ・上記12点のうち、5点に『玉泉習画帖』との画題・構図・描線の一致を含めた高い精度での類似傾向がみられる（表3では「◎」）。

前章でも述べたように『玉泉習画帖』は全4巻からなっており、「麟」「鳳」「亀」「龍」という順に、カリキュラムが構成されているが、この順序性が玉泉粉本（京芸教職研本）に記された課程名に表れた順序性とも概ね合致することも表3から読み取

ることができる。

次節においては、『玉泉習画帖』の図像と玉泉粉本（京芸教職研本）の図像との間にみられる類似傾向の精度を評価し、「『玉泉習画帖』との比較」（表3）を判定した手続きについて詳述することとする。

3.3 比較の手続き

複数の図像を比較し、両者の間にある共通性や類似について論じる研究は、美術史の分野において数多くみられる。本稿においては、筆者の印象や感覚による判断に頼ることなく、可能な限り精密な方法による比較を行いたいと考えた。

このような図像比較研究の手続きに関連する先例としては、円山応挙研究の第一人者である佐々木承平による研究^②が重要と考える。佐々木は、応挙作品を真贋判定する際、落款印章をカメラで拡大して取り込み、画像処理装置上の画面で照合分析を行うことによって複数の印跡の同一性を判定できると指摘する。また、作品の図像そのものについて同様の重ね合わせを行う意義についても佐々木によって言及されている。

本研究では、佐々木の研究手法を援用しながら、すでに同一の作者（望月玉泉）であると判明している2種類の図像を比較することによって、両者の関連や図像的背景を探ることとした。研究に使用する機材は、近年普及しつつある、高精細の画像読み取りが可能である電子スキャナー、および比較的簡易な操作で画像編集が可能となるソフトである。これらを組み合わせて活用す

②佐々木承平「落款印章照合分析研究はなぜ必要か」、『円山應挙研究 研究編』、中央公論美術出版、1996、

ることによって、正確に図像の重ね合わせを行うことができると考えられる。具体的な手続きは、下記の①～④に示したとおりである。

- ① 『玉泉習画帖』および玉泉粉本（京芸教職研本）の図像を電子スキャナーで読み取り、画像ファイルを作成する。
- ② 上記①において電子的に作成した、『玉泉習画帖』および玉泉粉本（京芸教職研本）の画像ファイルの縮小カラ一印刷を行い、目視によって図像の類似傾向の有無を検討する。
- ③ 画像編集ソフト・Adobe Photoshop CS6を使用して、図像が類似する2つの画像ファイルをコンピュータ上で重ね合わせる。具体的には、同画像編集ソフトのレイヤー機能を使用し、比較を行う一方の図像の上に、もう一方の図像を「不透明度=50%」に設定してペーストする。
- ④ 重ね合わせによって作成された図像を目視によって確認し、構図・描線等の一致を観点として、類似傾向の精度を評価する。

このような手続きによって、図像の重ね合わせを行い、その一致・不一致を確認することとした。重ね合わせによる比較調査（上記③・④）の対象としたのは、『玉泉習画帖』と玉泉粉本（京芸教職研本）との間で類似傾向がみられると評価した12組の図像である（表3において「○」「◎」を記載）。

次に、重ね合わせによる比較結果を評価した具体例として、図14を示す。これは

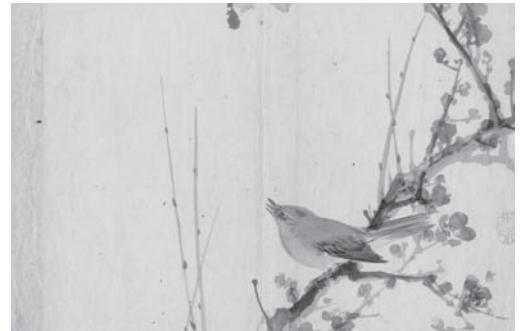


図14 類似傾向ではあるが描線は不一致であると評価した例（Adobe Photoshop CS6を使用）

前述の手続きに沿って、『玉泉習画帖』（亀）に掲載されている「紅梅 鶯」（前掲 図4、240×316mm）と玉泉粉本（京芸教職研本）のうち「參級拾七號」の裏書があるもの（前掲 図11、242×314mm）との重ね合わせを行った結果である。両者にはモチーフや構図に類似傾向が認められるが重ね合わせの結果、紅梅の枝の構造がやや異なるものであることがわかった。また紅梅の花の位置や個数にも相違があり、中央部右下に描かれている鶯の嘴や尾にも描線の一一致はみられなかった。このような点から、『玉泉習画帖』「紅梅 鶯」と玉泉粉本（京芸教職研本）「參級拾七號」との間には、構図・画題において類似傾向がみられながらも、描線等は異なるものであると評価した（表3において「○」を記載）。

次節においては、玉泉粉本（京芸教職研本）に描かれた図像と『玉泉習画帖』の図像とが高い精度での類似傾向であると評価できる5例（表3において「○」を記載）の中から、2例の詳細を示すこととする。

3.4 比較結果（高い精度での類似傾向）

①「雪中狗子」の例

『玉泉習画帖』（龍）には「雪中狗子」と題された画題が掲載されている。愛嬌を湛えた子犬が雪の中で座しており、両脇には南天と思われる植物が描かれている。この「雪中狗子」との類似傾向が認められる作例が玉泉粉本（京芸教職研本）に含まれている。前節で述べた手続きに沿って行った比較調査の結果を以下に示す。

図15に示したのは、A.「雪中狗子」(240×316mm)と、B.「二級壱號」(242×314mm)の裏書がある玉泉粉本（京芸教職研本）との比較である。両者の図像を重ね合わせた結果、大きさ、構図、そしてほとんどの描線に一致がみられた（図15のうち、A.「雪中狗子」の図像には水平に対して右方向に約1度の傾斜をかけている）。子犬の目鼻口は高い精度で一致している。垂れた耳のラインや爪先の描線に若干のずれがみられる程度で、体躯や四肢の輪郭もほぼ一致していることが認められた。向かって左脇の南天の茎、右脇の南天の実と葉脈の位置に相違はあるが、全体としては互いに図像の成立過程で強い関連があったと推察され、高い精度での類似傾向であると評価できる。ただし、B.「二級壱號」にぼかしで描かれた背景がA.「雪中狗子」では省略されている。この点については、次章で考察したい。

望月玉泉による「狗子」題材化の経緯を

②永瀬恵子「渡辺始興と円山応挙の『狗子図』について」『兵庫女子短期大学研究集録』、第27号、兵庫女子短期大学、1994、p.1

③音ゆみ子「応挙の子犬」、府中市美術館（金子信久／音ゆみ子）編『かわいい江戸絵画』、求龍堂、

検討するため、対照作例として図16を示した。2つの対照作品は、いずれも円山応挙（1733-1795）による狗子の作例である（「朝顔狗子図杉戸」（1784）、「狗子図」（1784））。永瀬恵子は、数多く描かれた狗子図の作例と応挙との関連について、「この「犬」を主要な画題として、特に生後二、三ヶ月の可愛い盛りの「仔犬」をとりあげて世間の人気を集めたのは円山応挙（1733-1795）をはじめとする円山四条派であった」^②と指摘している。応挙の時代から半世紀近くの隔たりはあるが、前述のとおり玉泉は江戸期から続く望月派の日本画家である。円山四条派からの流れをもつ玉泉が「狗子」のような画題、そこで使用された描法等を継承し、自身の表現に取り入れていたとみるのは妥当ではないだろうか。また一方で音ゆみ子は、応挙が描く「狗子」の特徴について「ふわふわの毛、丸々とした体、頭が大きく足の短いプロポーション、むっくりと太い足、あるいは、目と鼻の距離が近い顔のバランスなど「子犬らしさ」を挙げればきりがないが、応挙は、確実にこれらを押さえている」^③と述べている。

図15に示した玉泉による「雪中狗子」「二級壱號」は、いずれも音が指摘する「子犬らしさ」に近い特徴を備えていると見受けれる。前足をついて座するポーズや首を傾げた表情などからは、本稿において対照作例として示した狗子図をはじめとする応挙作品からの影響を強く感じる^④。

2013、p.24

④図版は割愛するが、大阪市美術館で開催された特別展「円山応挙〈写生画〉創造への挑戦」（2003）に出展された応挙作「狗子図」（個人蔵）は、玉泉の狗子図との類似性がさらに高いとの印象を受ける。



A. 『玉泉習画帖』(龍)「雪中狗子」(1891)



B. 玉泉粉本(京芸教職研本)「二級壱號」



A・Bの重ね合わせ (Adobe Photoshop CS6を使用)

図15 『玉泉習画帖』と玉泉粉本(京芸教職研本)とが高い精度での類似傾向であると評価した例(1)



円山応挙「朝顔狗子図杉戸」(1784)
(板地着色、部分)、東京国立博物館所蔵
Image: TNM Image Archives



円山応挙「狗子図」(1784)
(屏風、部分)、滋賀県立琵琶湖文化館所蔵

図16 【対照作例】円山応挙による狗子図

②「香魚」の例

前項で検討を行った「雪中狗子」が掲載されている『玉泉習画帖』(龍)には、「香魚」と題された画題がみられる。この頁では2匹の香魚、そして波を表す曲線と青色のグラデーションによって川面が描かれている。類似傾向が認められる玉泉粉本(京芸教職研本)との比較調査を前項と同様の手続きによって試みる。図17は『玉泉習画帖』に掲載された、C.「香魚」(240×316mm)と、D.「参級拾六號」(242×313mm)の裏書がある玉泉粉本(京芸教職研本)との比較である。両者を比較した結果、複数の相違点もあるが構図や描線の多くに一致が認められた。主な相違点は下記の3点である。

- ・余白の大きさに相違がある。具体的にはC.「香魚」はD.「参級拾六號」と比較して、左側余白が約22.5mm短く、上側余白は約6.5mm短い。
- ・向かって右側の香魚に描線のずれが認められる。背側のカーブと背鰓にずれがあり、D.「参級拾六號」はC.「香魚」と比較して若干、細身である。ただし香魚の大きさ、口元と尾の位置等は、概ね一致する。
- ・川面の表現に差異がある。D.「参級拾六號」は青色のグラデーションを多用して川面を表現するのに対して、C.「香魚」では主に曲線の波によって川面を表現する傾向がある。

このような相違の問題は次章において考察すべきであるが、前項で扱った「雪中狗

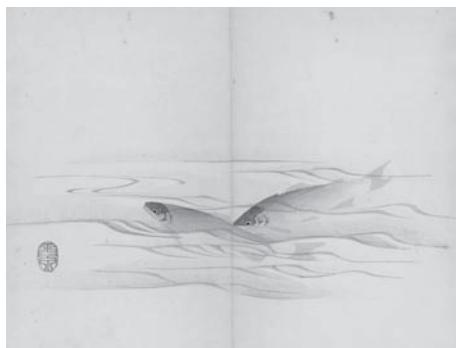
子」と同様に、両者の間には成立過程で強い関連があったと推察される高い精度での類似傾向が認められる例であると評価した。

対照作例として図18に示しているのは、いずれも望月玉泉による作例である。一方は、『玉泉習画帖』が刊行された3年後に玉泉が作成した、小学校用の毛筆画教科書『小学玉泉習画帖』(七)に掲載された頁(木版)である。画題は「鮎」であり、2匹の配置や波の描線等の構図にも、図17の両作例との類似が認められる。ただし、『玉泉習画帖』や玉泉粉本(京芸教職研本)の「香魚」では筆の面を使った筆法(没骨法)が示されているのに対して、『小学玉泉習画帖』の「鮎」では魚体や尾、鰓の輪郭を線描する方法が提示されている。このあたりの相違は、同様の画題であっても描き方の使い分けによって、学習者の発達段階と提示する技法との間に、一定の系統性が考慮されているようで興味深い。

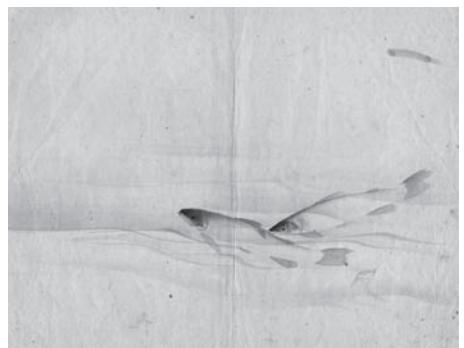
図18に示したもう1つの対照作例は、望月玉泉による掛幅「青楓香魚図」(1911)である^㉕。この掛幅は『玉泉習画帖』の刊行から20年後、玉泉78歳の作例である。描かれた香魚の数に相違があるものの、香魚の配置や川面の表現方法(波を表す曲線と青色のぼかし)において『玉泉習画帖』および玉泉粉本(京芸教職研本)との類似性が認められる。ただ、掛幅「青楓香魚図」は『玉泉習画帖』よりかなり後年の作例であるため、掛幅の作成過程と『玉泉習画帖』の作成過程との間にどのような「主従関係」があったのかについて、具体的な判断を行

^㉕「香魚」は夏掛として、玉泉以外にも多くの作例がみられるため掛幅としては比較的、一般化した画題

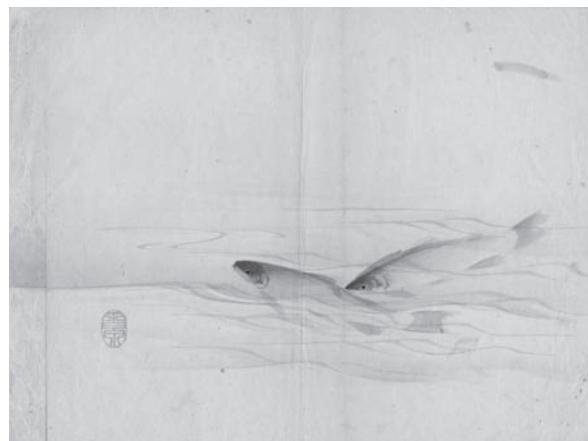
であるといえる。



C. 『玉泉習画帖』(龍)「香魚」(1891)

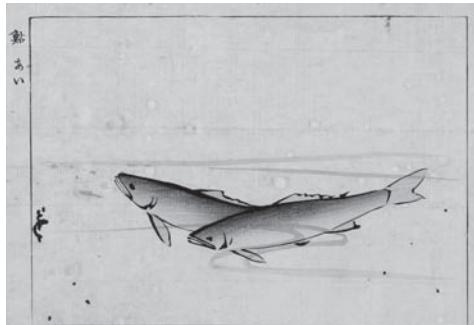


D. 玉泉粉本 (京芸教職研本)「參級拾六號」

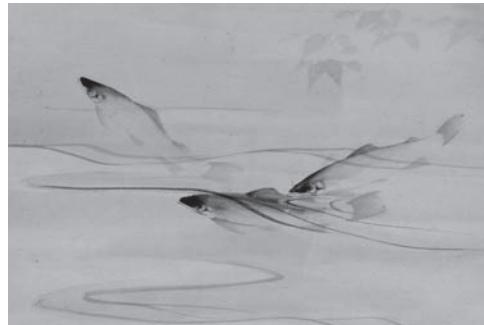


C・Dの重ね合わせ (Adobe Photoshop CS6を使用)

図17 『玉泉習画帖』と玉泉粉本 (京芸教職研本) とが高い精度での類似傾向であると評価した例 (2)



望月玉泉『小学玉泉習画帖』(七)「鮎」
(1894)、筆者所蔵



望月玉泉「青楓香魚図」(1911)
(掛幅、部分)、奈良教育大学所蔵

図18 【対照作例】望月玉泉による その他の香魚図

うことは難しい。本稿では掛幅「青楓香魚図」が、玉泉の普通図画教育への考え方と自身の画業とが密接に関連していたことを示唆する作例である点を指摘するにとどめておきたい。

4 『玉泉習画帖』にみられる図画教育観に関する考察

4.1 玉泉粉本（京芸教職研本）との関係

これまで述べてきたように、『玉泉習画帖』と玉泉粉本（京芸教職研本）との比較を通して、両者の間に強い関連を想像させる高い精度での類似傾向がみられる例があることが確認された。筆者はこの点をふまえ、『玉泉習画帖』の下図（検討段階を含む）として玉泉粉本（京芸教職研本）の一部が描かれたと考える。前述の佐々木研究では、このような図像の一致がある場合は、同じ下図から上げ写しされたか、あるいはどちらかがどちらかを上げ写したことになる可能性が指摘されている²⁶。消去法で考えると、『玉泉習画帖』は木版印刷であるため、作者である望月玉泉がこれを上げ写して粉本を作成することは可能性が低いといえる。また、同じ下図から上げ写しされたという可能性も否定はできないが両者の寸法がほぼ同一であることから、玉泉粉本（京芸教職研本）の一部は当初から『玉泉習画帖』の刊行を意図した下図として作成されたと考えるのが合理的である。

前章で「考察すべき」とした相違の問題については次のように考える。描線のずれや余白の違いについては、下図が望月玉泉から版元に渡された段階、あるいはやりと

りの段階で変更が加えられた可能性がある。それは木版印刷の作業効率を考慮したものなのか、教育効果を考慮したものなのかは不明である。ただ、「香魚」を例にすると、玉泉粉本（京芸教職研本）で川面の表現に青色のグラデーションが多用されるに対して、『玉泉習画帖』ではグラデーションが省略されて、主に曲線による表現となる変更がみられる。また、「雪中狗子」の例でもぼかしの背景が省略されていることに言及した。これらは、「ぼかし摺」が技巧的であり、表現上の制約もある木版印刷の特性を考慮した変更ではないかと推察される。

第3章において描線等が異なるものであると評価した、「紅梅 鶯」（図14）のような場合は、完成稿ではない検討段階のものが、後に京都府画学校や画塾等で粉本として活用されたという可能性も考えられる。

ここまで述べてきた『玉泉習画帖』と玉泉粉本（京芸教職研本）との関係を前提とした場合、下図と考えられる玉泉粉本（京芸教職研本）は、『玉泉習画帖』が刊行された1891（明治24）年の少し前に描かれたことになる（刊行への準備、版元での作業期間等を考慮すると数年程度か）。玉泉は京都府画学校を1889（明治22）年には去っている。粉本使用の時期と場所を図像のみから特定することは難しい。

4.2 図像がもつ背景

詳細については不明な点が残るが、『玉泉習画帖』と玉泉粉本（京芸教職研本）、両者の作成過程の間には何らかの汎用があったことが推察される。図像がもつこのよ

²⁶ 佐々木承平、前掲書、pp.355

うな背景からは、『玉泉習画帖』は普通教育での使用を意図して刊行されたが、専門絵画教育に通じるレベルの画題、筆法等が含まれていたことを読み取ることができる。

『玉泉習画帖』に掲載された図像と対照作例との比較からは、『玉泉習画帖』に掲載された図像は、円山四条派を中心とした京都画壇に由来する既成の表現内容を解釈する方法で選択され、教材化された図像であると判断できる。前述の『玉泉習画帖』「緒言」に表れているように、望月玉泉はあくまでも初学者を対象としているという点を『玉泉習画帖』の作成方針としていたと考えられる。

しかし一方で、これまでの議論から、玉泉は臨本に掲載する図像の質を抑えることが初学者への配慮とは考えていなかったようみえる。円山四条派の伝統を受け継ぐ自身の画業と比較して遜色のない図像を『玉泉習画帖』として提供した玉泉の教育理念は、普通教育の学習者に対しても、審美的な感覚を高めることを要求するものだったのではないだろうか。

結語

本稿においては、下記の2点を明らかにすることを通して望月玉泉が体現しようとした図画教育についての検討を行った。1点目は、玉泉粉本（京芸教職研本）の一部は『玉泉習画帖』の下図（検討段階を含む）として描かれたと考えられる点である。2点目は、『玉泉習画帖』にみられる図像の中には円山四条派等にルーツをもつ画題や表現内容を解釈することによって教材化さ

れたものがあると考えられる点である。

東京遷都の後、京都に残った日本画家たちは、京都府画学校の創設に奔走した。その一人である望月玉泉は京都府画学校において専門絵画教育を行うことで後進を育てる一方、普通教育を窓口として京都画壇の息吹を社会に向けて発信し続けていたようにも思える。『玉泉習画帖』は、そのような玉泉の望月派当主としての気概を雄弁に語っている。その後『玉泉習画帖』は、1906（明治39）年に玉泉が京都府立第一高等女学校・教授嘱託を依頼退職^⑦するまで使用されたものと考えられる。

本稿では、図像の比較を中心に扱い、そこから考察できる範囲に限定して論を進めてきたために未解明の点も多い。『玉泉習画帖』に基づいて行われた玉泉による京都府高等女学校での図画指導の詳細等については、さらに調査を進めていきたい。

⑦京都鴨沂会『鴨沂会雑誌』、第19号、1906、p.185

付記：

玉泉粉本（京芸教職研本）の所在を筆者にご教示いただき、また調査の実施に関して格別のご指導をいただきました京都市立芸術大学教授・横田学先生に心より感謝申し上げます。また、同大学芸術資料館学芸員・松尾芳樹先生からは同館が所蔵する画学校粉本の閲覧をご承諾いただき、多くのご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。調査実施の過程では図像の電子化に際して同大学非常勤講師・谷口由美子先生よりご助力を賜りました。深く感謝申し上げます。

【参考文献】

- 金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』三版、
中央公論美術出版、1999
倉田三郎 監修・中村享 編著『日本美術教育の変遷－
教科書・文献による体系－』、日本文教出版、1979
東京美術鑑賞会編『聚類 書画落款印譜』、第一書房、
1973
中村隆文『「視線」からみた日本近代 明治期図画教育
史研究』第4刷、京都大学学術出版会、2006
松尾芳樹『円山四条派の画法 京の絵手本〈上〉花鳥篇』
日賀出版社、1995
松尾芳樹『円山四条派の画法 京の絵手本〈下〉野菜・
動物・魚介／習画帖篇』日賀出版社、1995
山形寛『日本美術教育史』、黎明書房、1967
山口静一『フェノロサ 日本文化の宣揚に捧げた一生』
上・下巻、三省堂、1982

【図版出典】

図1～15、図17～18：

下記の原図版から電子スキャナーによって複写

- ・望月玉泉『玉泉習画帖』、田中治兵衛、1891（奈良
教育大学 所蔵）
- ・望月玉泉『玉泉粉本』、明治時代（京都市立芸術大
学教職課程研究室 所蔵）
- ・望月玉泉『小学玉泉習画帖』、田中治兵衛、1894（筆
者所蔵）
- ・望月玉泉『青楓香魚図』（掛幅）、1911（奈良教育大
学 所蔵）

図16：

- ・円山応挙『朝顔狗子図杉戸』、1784（部分、Image:
TNM Image Archives、提供・東京国立博物館）
- ・円山応挙『狗子図』、1784（部分、提供・滋賀県立
琵琶湖文化館）